

# 八幡町、そして国包の歴史



## も く じ

- 1 宮山古墳
- 2 望理里（まがりのさと）
- 3 国包は、元加古川西岸の村
- 4 湯山街道（和氣清麻呂の旅）
- 5 野村城
- 6 舟運・国包の河岸①
- 7 舟運・国包の河岸②
- 8 国包の渡
- 9 地場産業「国包の建具」
- 10 旧本岡家
- 11 寛延一揆・沼田平九郎
- 12 築山
- 13 亀之井用水
- 14 亀之井用水開削
- 15 綿作
- 16 元は、加古川線国包駅
- 17 櫟（けやき）の樹は残った

## 1 宮山古墳

天満大池に沿った道（県道宗佐・土山線）を北へ自動車を進めると、やがて加古大池の西に出、さらに、行くと八幡町野村の手前で、道は坂をつくって八幡町へと急降下します。



ちょうど、坂を下る手前辺りから印南野台地が西へ舌を出したように城山（じょやま・加古川市神野町）にむかって伸びています。

この舌のような台地こそ、古代文明の舞台であり、縄文・弥生・古墳・白鳳時代の人々の生活の跡がいっぱい詰まっています。

『加古川市の文化財』を参考にして、宮山遺跡を訪ねてみましょう。

宮山遺跡は、八幡町上西条と中西条の間で、上記の舌のような印南野台地から更に北へ突き出たところにあります。

昔、ここは上西条と中西条の共有地で、自由に土を取っていました。

昭和 39 年頃、この土砂が採集されていた場所から遺物を含む層がみつかりました。

昭和 40 年に一部、発掘調査が行われ、縄文時代後期の遺跡で、住居址や祭祀跡とみられる遺構が発見されました。

また、山頂部に古墳が集中しています。宮山大塚(中期古墳)の他、後期古墳五基が確認されています。

保存状態は悪くないが、江戸時代に盗掘されたようです。

宮山は小さな丘にあります。登り道は、桜並木で、春には桜いっぱいの丘になります。

\*『加古川市の文化財』(加古川市教育委員会) 参照、写真は宮山古墳の一基。

## 2 望理里 (まがりのさと)

『播磨風土記』が作られた奈良時代、八幡・神野地方は、望理里 (まがりのさと) と呼ばれました。

風土記の一部を読んでおきます。

・・・景行天皇 (けいこうてんのう) が巡幸の時、この村の川の流が曲がっているのを見て「この川の曲がり具合は、はなはだ美しい」と仰せられた。それで、この地を「望理里」という・・・



加古川は、今も美囊川 (みのがわ) と加古川が合流点あたりから、流れは西に弧を描きながら流れています。

『播磨風土記』が書かれた奈良時代、この辺りの流れは現在の流れと大きく異なっていたようです。

加古川は、宗佐（そうさ）の辺りから、国包（くにかね）の東を流れ、船町・下村のあたりから流路を変え、中西条の西に流れていたと考えられます。

八幡地区は、加古川が大きく曲がった東岸の地域に広がった、まさに「曲がりの里」でした。

山頂から眺めた望理里は、まさに絶景であったことでしょう。

その後を続けなければなりません。古代より加古川は、暴れ川でした。

大きな台風、それに長雨の時など、加古川はきまって洪水を引きおこしました。

水は、まっすぐに流れようとします。

望理里は、まさに洪水の直撃をくらう地域でした。

そんな証拠が地図に残されています。

### 3 国包は、元加古川西岸の村

右の図は、「元禄播磨国図絵（部分）読解図』の、現代の八幡町付近です。

郡界が描かれています。

国包（くにかね）村に注目してください。

国包は、加古川東岸にあるが八幡町ではありません。不思議なことに



加古川市上荘町に属しています。

その昔、郡堺が決められた時、「ここを加古川が流れ、印南郡と加古郡の堺にしたのではないか」と考えられます。

記録によると、国包は元加古川の西岸の村でした。村が移動したのではありません。

嘉禄元年（1225）、この地を大洪水が襲いました。そのため国包村は流され、あとは一面の河原となりました。

この洪水で、村の一部は川西になってしまいました。

古代より、加古川は暴れ川であり、嘉禄元年以前も、以後も加古川はしばしば流路を変えています。

そのため、『風土記』の時代（奈良時代）、と嘉禄元年（鎌倉時代）の風景は同じではないでしょうが、古代の加古川の流れは、国包・八幡地区あたりで、大きく湾曲していました。

国包には、江戸時代、洪水の時の避難所である築山（つきやま）が、今でも残っています。この地域は幾多の水害の歴史を刻んでいます。

\* 『加古川の流れ（建設省近畿地方局・姫路地工事事務所）』（1975）参照

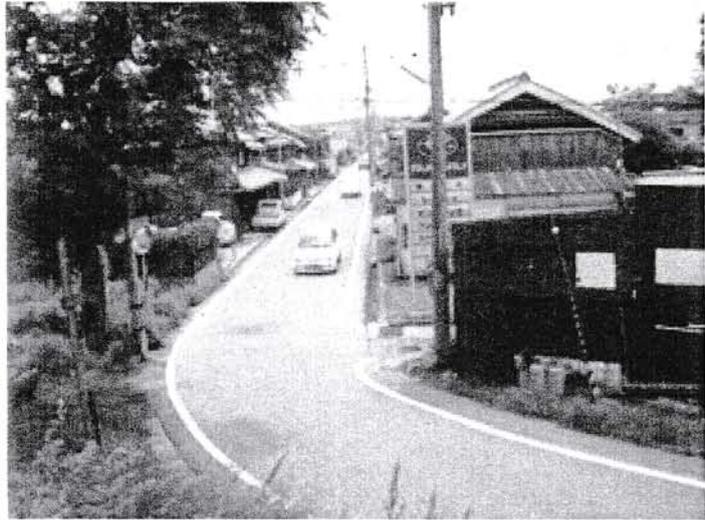
## 4 湯山街道（和氣清麻呂の旅）

八幡神社に伝わる「和氣清麻呂と猪」の伝承を紹介します。

しかし、どうして清麻呂が、八幡神社の伝承に登場したのでしょうか。

石見完次氏は、著書『古地名新解』で、宗佐（ソウサ）について、次のように説明しておられます。

「ソウサというのは、山を背景にした日当たりのよい地形のところをいう。この地形は、厄神山の東、草谷村近くまで続いている。社地（八幡神社の所在地）は、野村にあるのに「宗佐の厄神さん」というのは地形からきているからであろう・・・」



八幡神社は、北の方向から見て「宗佐の厄神」で、八幡神社の北を東西に古代の幹道が走っていました。湯山街道です。湯山街道は、古代の重要な幹道でした。

この道は、京都から宝塚へ、そして六甲山の北を通過して、途中に有馬温泉があります。そのため、後に湯山街道と呼ばれました。

有馬から更に山田へ、そして三木市の志染（しじみ）へ通じ、さらに加古川市の宗佐・国包・上荘・平荘を経て志方町から姫路市へ抜けます。

古代において、加古川の河口辺りの流路は乱流していました。加古川の広い河口は、旅人の渡川を苦しめました。

そのため、湯山街道がよく利用されています。湯山街道の旅人は、何よりも途中の有馬の湯で疲れを休めることができました。

村人は、「清麻呂がこの道（湯山街道）を通り、宇佐へ行った」と、考えたのかもしれない。

## 余話：加古川評定の場所は、野村城か？

天正六年(1578)二月二十三日のことです。

秀吉は、7500人を率いて加古川へ向かいました。

この会議の焦点は、播州最大の勢力を誇る三木城主・別所氏が秀吉側に味方するか、毛利川に味方するかを決する会議(評定)が、加古川で行われました。

世に名高い「加古川評定」です。

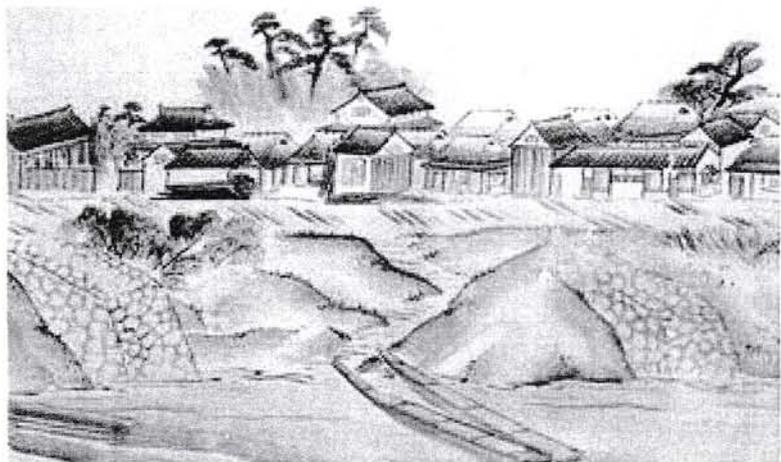
三木・別所氏は毛利川に味方しました。

この加古川評定の行われた場所は、加古川城(場所は現加古川町称名寺)といわれていますが、そうではなく野村城がその場所であると唱える有力な説もあります。

## 6 舟運・国包の河岸①

河岸(かし)は、  
河舟の港です。

河岸には船持・問屋・船乗りが居住し、また近隣の村々の生活物資購入の場所として町場を形成していました。

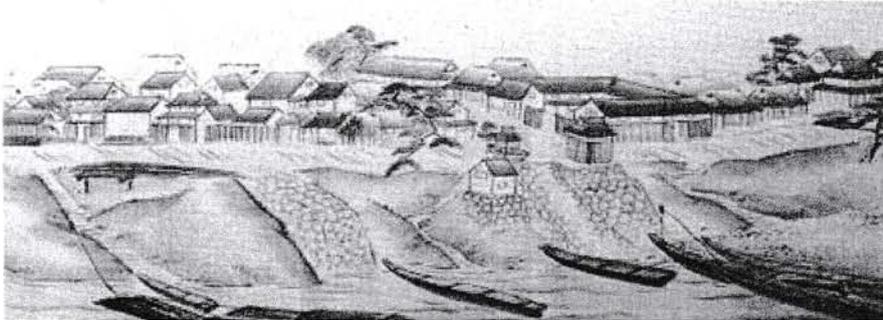


河岸として栄えた国包村(くにかねむら)の元文二年(1737)の集落構成は、次のようであった。

家数：一二五軒(うち百姓、七四軒・水呑、五十軒・・・計算違いか)

人数：六七〇人

大工四、桶屋二、医師三、木挽一、材木屋三、陸塩売四、旅籠屋五、河船宿六、殺生（川漁師）六、蚕種商二（村明細帳より）



戸数に比して水呑が多いが、これは行商や小商いを含んでいるのでしょ

また、宗佐（現：加古川市八幡町）は、国包の土地を借りて河岸を開いて、宗佐や周辺の米などを運んでいました。

国包の河岸は、湯山街道との交差点でもあり、物流の一集散地で町場の性格を持っていました。

国包の河岸については、もう少し続けます。

\*絵は「国包浜実況図」（国包畑家所蔵）

『加古川の舟運の研究（吉田省三著）』（滝野町）参照

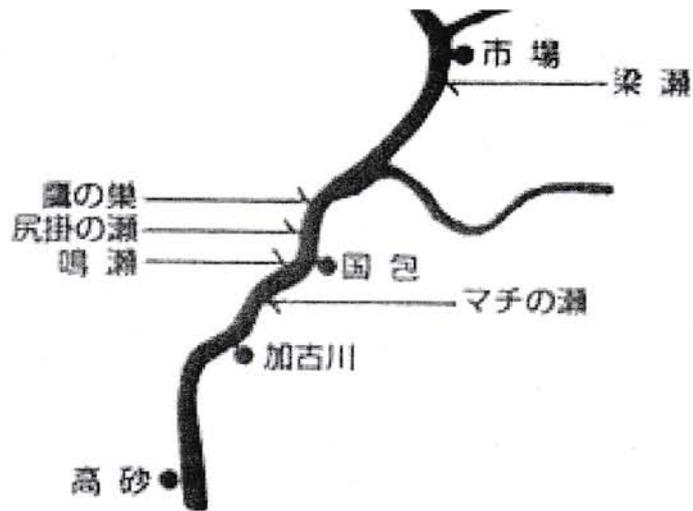
## 7 舟運・国包の河岸②

川筋の最大の難所は国包（くにかね）のすぐ上手にありました。

美囊川（みのがわ）が加古川と合流し、国包の北あたりは、全体が岩盤でミオ（水路）らしいものがなかったのです。

これは、またオヤジ  
(船頭)の腕の見せど  
ころでした。

ここをすぎると、大  
きな難所は少なく、高  
砂までは帆走ができ、  
天気の良い日には鼻歌  
も出たといひます。



### 航路と難所

やがて、高砂につきました。

帰りは、帰りの荷物を積み、オヤジ(船頭)は荷の受け渡しのために居残の  
こり、中乗りと艀のりは、国包でオヤジ(船頭)を待った。

オヤジは国包までは陸路を帰った。

その日は、ふつう国包で泊りました。そんな時は、きまってオヤジは晩のお  
かずを仕入れてきました。

秋ごろは、イワシかサイラ。冬は、ナゴヤ(小形のふぐ)が多かったそう  
です。

ナゴヤの臓物を抜き、野菜を加えての鍋はこたえられなかったでしょうね。

国包の夜は、苦しい労働を忘れる楽しみがあった。

\*『加古川の舟運の研究(吉田省三著)(滝野町)参照

## 8 国包の渡

国包は、京都から伊丹へ、そして有馬・三木そして加古川市志方・姫路を通る街道「湯之山街道」と加古川の水運が交わる場所にありました。



そのため、農村部にありながら商工業がさかんで、古くから唐箕（とうみ）や建具などの産業が栄えました。

上流から良材が筏に組んで運ばれたためです。

そして、家具は、姫路・加古川・高砂に船で運ばれた。国包は川と街道の交わる場所にありました。

しかし、江戸時代は、加古川には姫路の町の防衛上のこともあり橋が架かっていません。

国包を通る街道が加古川に突き当たるところに、渡し場が設けられました。

その後も、橋は架けられていません。

今、渡し場のあった場所は、整備され、その跡は全くないが、渡し場のあった場所に、説明板とその脇にプレート（写真）が設置されています。

あるお年寄り「国包の側に船頭の小屋があって、小さい窓があり、お客があると覗いて船を出した。多いときは一そうに十人ほど乗せて運んだ」

寛延二年の正月・10日頃から「西条組大庄屋を討ち潰すべし・・・」という張り紙があちこちで張り出されました。

正月16日七ツ時(午後4時ごろ)村々で早鐘がならされ、大勢の人々が鳶口や熊手を持って押し寄せました。

まもなく、平九郎宅は散々にうちつぶされました。

この打ち壊し計画の中心は伊左衛門でした。

姫路全般一揆は、平九郎宅打ちこわしという一件から姫路藩を揺るがす全藩一揆へと広がりました。

一揆の後には厳しい取調べがありました。

\*『加古川市史(第二巻)』、『加古の流れ』(加古川市史編さん室)

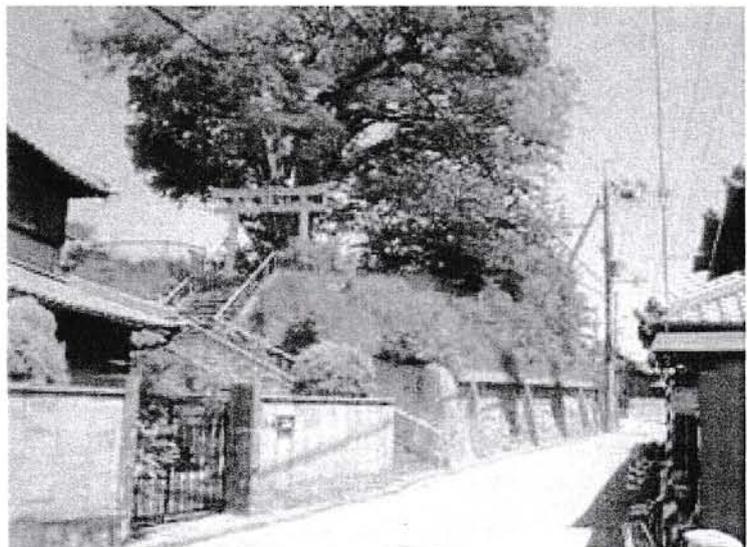
## 12 築山

加古川は暴れ川でした。

嘉禄元年(1225)、洪水は国包を襲いました。

この地は、加古川が大きく蛇行し、特に洪水が多い地域でした。

国包には写真のような人工の築山(つきやま)があります。



洪水時の避難場所です。

宝暦六年（1756）、国包出身の長浜屋新六郎という人物が、洪水で被害に困る住民のために私財を投げ打って築いたものだと伝えられています。

当時は、水害のため飢饉の状態でした。

この工事により、多くの貧しい人々が仕事を心得て救われたとも伝えられています。

後年、この築山に土地の人々が感謝の気持ちと安全への祈りをこめ築山神社を築きました。

尚、この築山には近くから見ると一本のように見える大樹があります。

この木は、二本の榎が一本のムクノキを両脇から包み込むような形で成長して、三本あわせた木の周囲は7mにもなります。

樹齢は240年ほどで、築山を造ったときに植えられたともいわれています。

樹木では唯一の加古川市指定の文化財となっています。

### 13 亀之井用水

「国包（くにかね・加古川市上荘町）は、5日も日照が続くと、ツルベで朝夕灌漑をしなければならず、他の村から嫁入りが嫌われていた」といわれました。

そんな窮状を救うため、文化13年(1816)、畑平左衛門が美囊川(みのがわ・三木市)が加古川に出る手前から取水するために堰をつくりました。



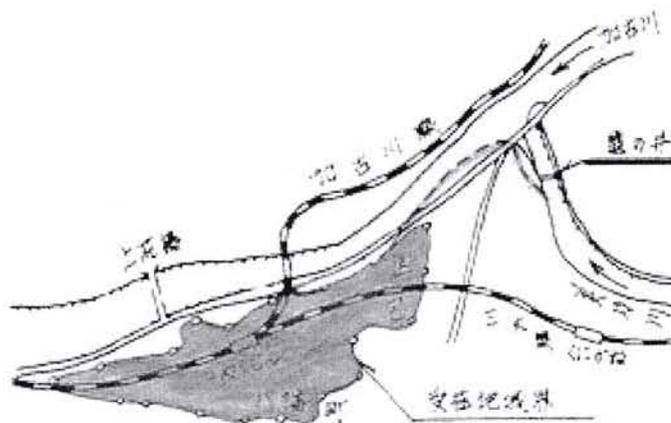
この用水は、国包村、船町それに宗佐村の畑地を潤し、水田化するためのものでした。

井堰の構造が割石を亀の背中のように丸く積み上げたことから、堰は「亀の井堰」、用水は「亀の井用水」と呼ばれるようになったといえます。

現在、石組みはなくなり、写真のようにコンクリートの堰に変わっています。

\*『兵庫のため池誌』(兵庫県農林水産部農地整備課)参照

写真上: 亀の井堰、下の図: ぬりつぶした所が亀の井用水の受益地域



## 1 4 亀之井堰開削

### 加古川市史に読むわがふるさと国包

(\*2003年、畑偕夫編より部分引用)

国包村の江戸時代の石高は次のとおりです。

正保 3年（1646） 310石

元禄15年（1702） 310石

天保 5年（1834） 535石

天保五年の調査で石高が7割余増加しています。これは亀之井堰開削とこれにともなう新田の開発がもたらしたものです。

文化13年（1816）に国包村の畑平左衛門（応親）が願主となって、畑源右衛門・畑伝右衛門・高橋源右衛門および都染村の大工藤蔵が、大規模な用水路の開削を計画しました。

田は川面より高く、溜池を築く所もないため、田方の稲作には夏中井戸からつるべで水を汲み上げて、灌水する状態でした。

このため他村の女はこの村の嫁になることを敬遠していたといえます。

この用水不足を解消するため、平左衛門らは、深夜ひそかに線香に火をともし、その光によって測量を行いました。昼間測量などをしては、村民の疑惑を買い、また井堰の場所が他領であったため夜の調査となったのです。

その結果、美囊川に井堰を設けることによって、用水の引込みが可能であることがわかりました。

平左衛門らは美囊郡正法寺村・下石野村ならびに正法寺（寺院）とかけ合いました。着工には明石藩との水利権の交渉や、工事費の捻出、水路用地の確保などいろいろの問題がありました。

文化 10 年 (1813)	17. 3	文政 5 年 (1822)	17. 4
天保 3 年 (1832)	13. 4	天保 13 年 (1842)	16. 2
弘化 4 年 (1847)	14. 5		

秋には真っ白い綿花の風景が広がっていました。

\* 『近世農業経営の展開(岡光夫著)』(ミネルヴァ書房)参照

## 16 元は、加古川線国包駅

国包(くにかね)は、志方町の投松(ねじまつ)と共に難解地名としてよく紹介されます。

そして、加古川市の人にとっても、国包はよほど八幡地区とされているらしく、国包には下の写真のような丁寧な説明板があります。

国包の歴史は、ですが、JR 厄神駅(加古川市上荘)を「八幡町探訪」に含めて書いておきます。

JR 加古川線は、大正二年(1913)、加古川～西脇間で開業しました。会社名は「播州鉄道」でした。



開業後、経営難もあり、大正 12 年(1923)に播但鉄道に経営は移りました。

その後、国鉄に買収され、さらに国鉄民営化の中で、JR 加古川線となって現在に

いたっている

厄神駅に話です。大正五年(1913)、西脇まで播州鉄道は開通しました。この時、国包に「国包駅」が設けられました。

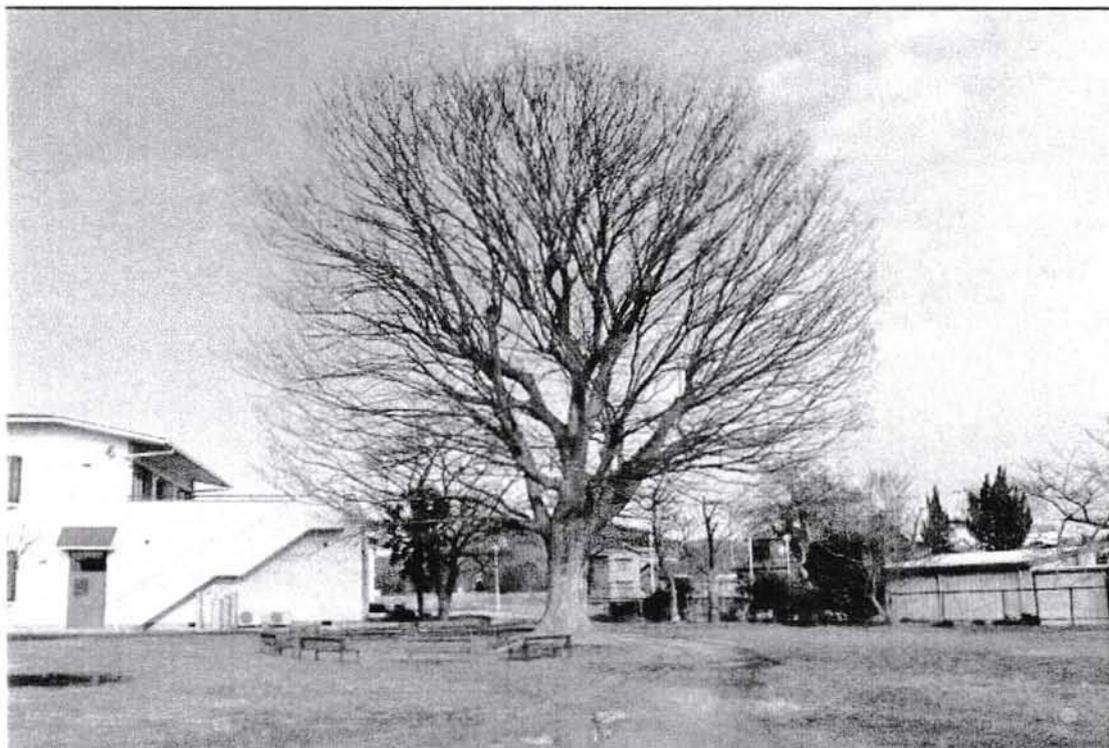
そして、大正五年(1916)に国包と別所(三木市)間に三木鉄道が開通し、翌年、三木まで延長されました。

三木鉄道に「国包駅」が設けられることになりました。

それともなあって、加古川線の「国包駅」は「厄神駅」になり現在に至っています。

現在、三木鉄道は廃止され、「国包駅」の名称はなくなりました。

## 17 櫟(けやき)の樹は残った



## 加古川市との合併

明治22年4月1日の町村合併でも、国包地区は印南郡上荘村のままで残り、今日まで川東ですが上荘地区国包として続いています。

八幡村と加古川市との合併が持ち上がりました。しかし、八幡村が加古川市と合併するとなると国包は川東と川西の上荘村とに分かれる分村問題に発展しかねません。

昭和30年1月25日に、加古川市の議長・合併委員長・助役が山手三ヶ村（上荘村・平荘村・八幡村）を訪問し、正式に合併を申し入れました。

いろいろと課題はありましたが、その後、合併の話はトントン拍子に進み、3月12日に加古川市と山手三ヶ村との合併を決議しました。

昭和30年4月1日、加古川市上荘町、平荘町、八幡町は加古川市として新しいスタートをきったのです。

## 櫟（けやき）の樹は残った

ここで問題が残りました。国包地区の通学の問題です。

国包地区の児童は、近くに八幡小学校があるのに川を渡って、二キロメートルの道を歩いて上荘小学校へ通っていました。

二年生までは国包に分教場があり、三年生から本校へかよいました。

昭和 30 年 4 月、山手三ヵ村（上荘村・平荘村・八幡村）が加古川市に合併したため、小学生の通学区の問題が話し合われました。

町内会長らの粘り強い交渉が実を結び、昭和 37 年（1962）4 月の新一年生から国包地区の児童は八幡小学校へ通学できるようになりました。

この分教場があった場所は、いま国包公会堂となっています。

分教場には大きな樺の樹（写真）がありました。

分教場の写真がほしいのですが、どなたかお持ちの方はおられませんでしょうか。

中学校は、戦後六・三制の実施に伴い、昭和 23 年に上荘中学・平荘中学が合併して組合立両荘中学校が設立されましたが、国包地区の中学生は、八幡・神野・加古三ヵ村の組合立山手中学校へ通学するようになった。

\*写真：分教場にあった樺（1 月 23 日撮影）